

明治時代の京都府立第一高等女学校における教育の一断面

『鴨沂会雑誌』をもとに

佐野仁美

はじめに

明治時代の京都では、西洋化の波の中で、新しい女子教育をどのように展開していったのであろうか。明治維新後の京都では、一八七二（明治五）年八月の学制頒布よりも早い一八六九年に、町衆の手による番組小学校が開校した。京都府中学校が翌年一二月に作られたのに続き、一八七二年四月には上京区土手町通丸太町下の駒之町旧九条殿河原邸に新英学校及女紅場がつけられた。敷地面積二二五一坪余りにして一七棟、寢殿その他の建物を教室に充てたといふ。⁽¹⁾これが、長く続く学校としては日本初の女子の教育機関であり、一八八七年に府立高等女学校に発展していく。⁽²⁾

一八八七（明治二〇）年には、京都府立高等女学校の同窓会として会員一五五名による京都鴨沂会が設立された。同年に同窓会誌である

『鴨沂会雑誌』が発刊され、一九〇六年までは年一回、戦時下まで年二回刊行されていく。同窓会は、日清日露戦争における寄付をはじめ、雑誌の発刊、講習会開催、購買等の事業部の運用、支部会の設置、支部主催の音楽会、バザー等の業務を運営してきた。一九〇九年に社団法人となった京都鴨沂会は、二五周年にあたる一九一二年には三三九七名の会員を擁する組織になり、落成式が行われた同窓会館の一部を貸し出す等、同窓会と女学校は密接なつながりを保ち続けた。本稿では、この『鴨沂会雑誌』を資料として、明治期の代表的な女学校の一つである京都府立高等女学校における教育を辿ってみたい。

一 高等女学校成立まで

開校当初の新英学校及女紅場では、華族、士族の女子七八名に、英語学ならびに女紅と呼ばれた裁縫や機織、袋物、押絵等の手芸を中心

とする女性の手仕事を教え、民衆にも入学を許して、総数一五九名の生徒が学んでいた。英学科の生徒は女紅も学ぶことになっており、長崎で英語を学んだ野辺地尚義らが本場話となり、京都府顧問の山本寛馬の妹八重(後の新島讓夫人)が権舎長(寄宿舎の監督)を兼ねて機業と養蚕を教え、当初はイギリス人イーバンス夫妻が英語を教えていた。野辺地は、後に和風の鹿鳴館と言われ、国内外の賓客をもてなす場であつた紅葉館の館主を務めた人物である。新英学校及女紅場は、文明開化の時代に英語を学ぶ学校であるとともに、女紅を授けるという当時の殖産興業の方針にも沿つた学校であつた。女子教育が始まつたばかりの同校は注目を集めて来校者も多く、一八七二年六月には明治天皇が臨御されるなど、皇室とのつながりも深かつた。

同年五月に見学した福沢諭吉は「京都学校の記」で、英国の教師夫婦を雇い、婦人は兒女を預かり英語の外に縫針の芸を教えていること、華士族、商工平民の七、八歳より一三、一四歳までの兒女一三〇人余りが学び、「おのおの貧富にしたがつて、紅粉を装い、衣裳を着け、その装潔くして華ならず、粗にして汚れず、言語嬌艶、容貌温和、ものいわざる者も臆する気なく、笑わざるも悦ぶ色あり。花の如く、玉の如く、愛すべく、貴むべく、真に兒女子の風」を備えていると記している。⁽³⁾ 断髪素顔の東京の女学生に較べて、諭吉は始まつたばかりの京都の女学校に通う様々な階級の女子たちを好意的に捉えている。

新英学校は一八七四(明治七)年に英女学校と改称するが、始まつたばかりの女子教育への理解を得るのは困難で、生徒がなかなか集まらなかつた。生徒数が三一名となつた一八七五年には珠算、筆算および

習字を加え、教授内容が変更されていく。一八七六年には女学校及女紅場と称し、英語の他に和漢学を教え、小学校裁縫及び諸礼科教師ならびに女紅場教師を養成する。一八七九年には修業年限三年で英学と女紅、女学の三つの学科を持つに至つた。絃歌科を置いた他、香道や插花を兼修できるようにする一方で、一八八〇年には女子の産業を育てるために生徒二名にレース製造を伝習させ、翌年からは養蚕場を設けて生徒に実習させた。

その一方で一八八〇年には、府下より小学校教員志願生を募集して、五〇名が入学した。小学校が開設されたものの、圧倒的に不足していた教員を養成することになつたのである。同時に、開学当初の洋学から普通の学問志向への転換が窺え、伝統的な稽古事を通して日本人女性が備えるべき精神性を身につけることも目指されていた。つまり、一般に女子教育が知られていなかった時代に、率先して西洋文化を移入しようとするハイカラな面と、伝統的な面とが共存していき、その後も受け継がれていく。

一八八二(明治一五)年に女紅場は廃止され、普通学科、師範学科、手芸専修科を置く京都府女学校と改称し、三年の修業年限で、普通学科では修身、和漢文、算術、地理、歴史、博物、物理、裁縫、家事経済、諸礼、習字、図画、体操、唱歌の科目を置いた。手芸科には裁縫、刺繡、機織、押絵、袋物、養蚕等の教科を設けた。女教員伊藤ヨネに音楽取調掛で唱歌を伝習させ、一八八四年に唱歌科を設ける一方、絃科で箏曲も教えられていた。一八八五年には将来の婦人の手仕事として、レース科が置かれた。一八八六年には師範学校令により、師範学

科と附属小学校、附属幼稚園は尋常師範学校に吸収されることになり、普通学科が中心となっていく。

この時期の教育について、一八七五(明治八)年七月に六歳二か月で入学した太田(岡田)しげ子の証言を見てみよう。⁽⁴⁾父太田岩之助が学校の御用掛をつとめていた太田は、入学して文庫と机をおき、先生に手本を書いてもらって「いろは」の習字をする一方、英語をウエットン夫人に教わり、試験は横村知事の臨場の下、読書をしたり字を書いたりするものだったと述べている。学校の隣に住んでいた西洋人の家に楽器があり、一八七六年頃、唱歌の時間にそこへ行き、初めて唱歌を習ったという。同級生の多くは華族のお姫様で、言葉遣いが大そうきれいであったが、皆途中でやめてしまった。太田は一八八〇年頃、英語科から裁縫科に代わったが、裁縫科には機や刺繍、押絵や剪糸(せんさい)、本古来の造花もあった。一八八六年に修了して本科(普通学科)に入学し、一八八九年に卒業した太田は、一八八六年の皇后の行啓の折には、男子と同じ方式で指導されて、球身体操、徒手体操、亜鈴体操をしたという。小さい時には帯を締め、束髪で通学したが、日本髪にも結い、洋服や袴を身につける等、その時々で様々な服装であったと記している。太田にとって自らの土台となったのは、一四歳頃に週一時間の修身談で明徳と忍耐について教えを受けたことであり、女の嗜みについても細かく指導を受けた。諸先生方の教えをよく守って学校の名を汚さないように気をつけていると語っている。

このように、「いろは」から教えを受けたのは自分だけであり、一四年間通った「学校の内娘」と語る太田の証言からは、新しい西洋文

化と伝統的なもののどちらも教育課程に取り込み、手に仕事をつけるという学校の方針が見えてくる。当時は、女子に何を教えるのかを試行錯誤し、社会のシステムも刻々と変化していった時期であった。ちなみに、一八七七(明治一〇)年に同志社女学校が開校したが、そこで中心となったのはアメリカ人女性宣教師だった。彼女らには祖国におけるキリスト教主義の女子教育という明確なイメージがあったわけ、かなり事情が異なっていただろう。逆に父兄の間には、新奇なキリスト教を心配する声も根強く、生徒数から見れば京都府女学校が選ばれることの多い理由ともなっていたのである。

二 高等女学校成立から日清戦争前まで

女子教育への気運が高まって入学希望者も増え、京都府女学校は一八八七(明治二〇)年に、日本初の公立高等女学校である京都府高等女学校と改称した。同年に、同窓会の京都鴨沂会が組織される。この会は、旧交を温め、知識を交換し、喜びや悲しみを分かち合う目的で年一回学校に集まり、現旧職員の話演説とともに会の状況を雑誌に記録し、会員に配布する活動から始まった。

京都府高等女学校は、普通学科を本科として修身、国語、英語、数学、地理、歴史、博物、理科、家事、唱歌、図画、体操を置き、三年の課程を四年に改めた。高等小学校二年を終えたものが初級に入れる制度となり、学力が劣る者は予科生として在籍し、本科に編入するには英語が必修であった。家事では、上級生には洋服裁縫を教え、西洋

料理法を実地練習させている。別科とした和服、洋服両裁縫科では、日用必須の学科として読物、習字、算術、家事、理科、唱歌が課されて随意で英語を修めさせたほか、随意科として和歌、点茶、插花、絃歌が置かれ、「優美の思想」を養った。西洋服と英語は人々が盛んに褒めるので、イギリス人婦人を招聘している。前述の太田が語っているように、体操の指導も進み、亜鈴(ダンベル)や球竿(きゅうかん)背筋の矯正に用いられる両端に小さな球がついた竿といった普通体操の用具、シーソー等の器械を据え付け、生徒は袴、たすきをつけて参加した。また時々、山上川辺を歩き回り戸外運動をさせて、身体や気構えを養った。⁽⁵⁾

以下に取り上げたいのが、一八九〇(明治二三)年から一九一七年という長期にわたり校長を務めた河原一郎の思想である。河原は、一八七五年より石川県英学校や石川県中教師範学校の教員をつとめた後、京都府庁の学務課長をしていた。後に高等教育会議員に任ぜられ、一八九九年に公布された高等女学校令にも関わった人物である。同窓会との交わりも深く、『鴨沂会雑誌』に寄稿していた河原の論考を中心に、明治時代の京都府高等女学校の様子や教育の方針を探ってみよう。最初に河原の教育方針である。赴任当初、生徒の多数は絹布を纏い衣服の競争が激しく、式日では人目を驚かすように着飾っていた高等女学校の校風を、河原は健全質素にして、勃興すべき女子教育の根本的模範にしようとした。⁽⁶⁾華やかなイメージの女学生がマスコミに取り上げられることも多かった時代に、まずは生徒が礼儀を重んじ言動を慎むように導き、世間に女子教育の必要性を認めってもらうことを目指したのである。

一八九一(明治二四)年一二月に「中学校令」が改正され、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス」の条項により、高等女学校は男子の中学校に対応する女子の中等教育機関として初めて位置づけられた。女子になくはならない技芸専修科を設置できると書かれているが、修業年限や入学資格、科目についての記載はない。河原は同年の卒業式で、学者ではなく優良の婦女、技芸家ではなく良婦賢母をつくることを目的とした教育を行っており、女学校で得た技量に於てよく一家を經理し、子女を養育するつとめに堪えられると述べている。⁽⁷⁾

ちなみに、初代文部大臣の森有礼は、一八八七(明治二〇)年の中国地方学事巡視の際の説示で、女子の就学が低いことを挙げ、子を産めば直ちにその養育に従事すべき女子は天然の教員であり、女教員に小学校幼年の授業を担当させるのは効益があること、女子教育の主眼は人の良妻となり人の賢母となり一家を整理し子弟を薰陶するに足る氣質才能を養成することにあること、国家富強の根本は教育にあり教育の根本は女子教育にあることを述べている。河原が述べる良妻賢母としての女子教育の役割は、森の考えに沿っていることがわかる。

河原は良妻賢母という目的のために、どのように教育を進めようとしたのだろうか。河原は一八九二(明治二五)年一〇月の関西教育家大会で、妻は夫の談話を理解し辛勞を慰めて一家の要務を謀ることができれば十分で、夫と同じ学識は要せず、幼少の児童が大成する地盤を為すべき学識を備え、一家を整理するのに必要な技芸と家人を慰めるべき二、三の優美な芸能を有すれば足りるという。修業年限は六年が

適当で世間一般の学校に採用されている学科は廃すべきでないが、良妻賢母を作るのが大目的であるので、学科の組織はいたずらに高尚にならず、修身科と家政科に重きを置き、兼ねて美術の思想も養成する仕組みであり、卒業後引き続き必要な学科の練習もできるが、家政の実習に力を注ぐ傍ら、他の有益な学科を兼習させる仕組みにならざるを得ないと語っている。

同じ論考で河原は、少しも英語を知らなければ児童の教育に事欠き、一家の主婦としても不便で、ある程度までは必ず課さなければならぬこと、ひ弱な女子を改良する機会としても必要な体操は、女子教科中の困難なもので、どの種類の体操が最も女子に適し、体育の目的を達するのかわかるといふ調査が望まれること、数学は幾何の初歩程度でよく、良妻賢母をつくる目的から離れがちな歴史は、修身科と連絡して忠君愛国の精神を涵養するように務めなければならないこと、家政科は裁縫、衛生、看護、家庭、教育から料理法まで必ず課すべきこと、美術思想を養うには写生画や図案を課し、点茶、生花、和歌等を必ず履修させ、絃歌、押絵、編物、造花等は美術の観念や緻密な思想を養うのに適切で、有志の生徒に課す道を拓いてもよいことを述べている。⁽⁹⁾

このように河原は、修身科と家政科に重きを置き、普通学科のレベルは男子以下で十分であるとする反面、優美な思想を養う図画や和歌、伝統的な日本文化や稽古事を重視していた。英語が必修で、体操がもつとも困難な科目と位置づけられていることに注目しておこう。河原は、国家の富強を図るには人才を要し、人才をつくるには先ず賢母を作るのが急務であると述べ、良妻賢母教育と富国強兵政策をつなげ

ている。そのために女子高等教育の普及を図り、女子教育の方針を速やかに定めて開示するべきであると主張している。

ところで、運営資金がなくなつた京都府高等女学校は、経済的に行き詰まり、一八八九(明治三二)年より地方税外特別経済として、大谷派本願寺からの寄付金や授業料で経費を賄うことになった。この困難な状態は、一八九四年に地方税で学校が維持されることが決まるまで続く。⁽¹⁰⁾一八八九年には、尋常小学校を卒業した生徒のために二年の予備科を置き、随意科に詠歌を加えて、插花や茶儀を千家、池坊等の宗匠家や専門家が教えている。一八九〇年には二棟の教場を新築し、東京音楽学校卒業生の宇野筆子を招聘して、一カ年の課程の唱歌専修科を置いた。同年四月の在籍者の状況は、本科二一一名、予備科一一五名、三年制の別科和服裁縫科一〇二名、洋服裁縫科四七名の計四七五名であり、そのうち寄宿生は一四〇名、管外生は二〇九名⁽¹¹⁾で、府外からも志望者を集めていたことがわかる。

一八九二年には練習科(後の補習科)を設けて、修身、和漢文、英語、図画、唱歌、家事の教科を置き、卒業生のうち志願者が修身、家事の他に必要な学科を選んで一年間研究できるようにした。⁽¹²⁾一九九四年七月の在籍者は、本科二四六名(練習生六名)、予備科八四名、別科裁縫科一五三名、唱歌専修科二七名の計五一〇名で、内訳は華族一八名、士族一六二名、平民三三〇名であった。⁽¹³⁾

以上のように、京都府高等女学校は、創立当初からの英語に加え、洋服裁縫科を新設し、西洋料理法等を教える等、欧化主義の傾向が見られたが、日清戦争に向かう時期にはその反動も起つた。一八九一

(明治二四)年の全国の公立高等女学校の数はわずかず七校⁽¹⁴⁾で、高等女学校が制度として確立したばかりの時期に、京都府高等女学校では卒業後に学ぶコースが設けられた。河原は、男子より低いレベルで良いと考えていたが、学びたい女性はいたのである。経済的に最も困難を抱えた時期であったが、授業料と寄付金で乗り切り、募金で校舎を増築している。普通教育を中心に据えながらも、優美な思想を培うための様々な科目が置かれ、家元から指導を受ける科目等、充実した教育課程を持つ伝統校で、おそらく余裕のある家庭の子女が多くを占め、全国から生徒を集めたのである。

三 日清戦争期から日露戦争前まで

一八九五(明治二八)年一月に「高等女学校規程」が定められ、入学資格が四年の尋常小学校卒業となり、修業年限は六年で、土地の情況により一年間の伸縮が認められた。それに従い、京都府高等女学校は、予備科二年と本科四年を合併して本科六年とし、修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操を置き、随意科として漢文を加え、英語は裁縫に変更できるようにした。また、練習科を高等女学校卒業者対象の一年または二年の補習科に変更し、修身、国語、外国語、数学、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操、漢文、教育の科目を置いた。「教育」は、教育の原則、教授法、保育法等、家庭における教育に役立つものである。別科裁縫科は、尋常小学校修了の一二歳以上を対象にした三年の裁縫専修科となり、唱

歌専修科を廃して、その課業を裁縫専修科に附属させ、希望者に一年ないし二年間、週六時間から八時間唱歌及楽器用法を指導した⁽¹⁵⁾。特に音楽を修業しようとする者には正課時間外にて、声楽、ピアノ、オルガン、ヴァイオリンや音楽論を指導し、本科、裁縫専修科ともに、家事、裁縫、音楽の一部として茶儀、生花、箏曲、押絵、編物を希望者に週一回もしくは二回教えた⁽¹⁶⁾。

女学校の制度が整い、女子が学問をするとう生意気になると言われた時代は過ぎ去ったが、当時の女子教育関係者が改良に苦心していた体操について見てみよう。一八九六(明治二九)年の体操科の細目は、準備体操、徒手体操(器械体操)等の体操と、行進、輪もぐり、つれだち遊び等の遊嬉であり、女教員が担当して面白い遊戯を加えて生徒の興味を増し、熱心に奨励した。体格検査が行われ、虚弱な人や体格構造の悪い人、身体異常の人には懇ろに養生法が説明され、脊柱の湾曲する人も前年度に比べ半減したという⁽¹⁷⁾。この時期の体操科では、生徒の興味を引くように体操に遊戯が加えられていたこと、衛生面から検査をもとに科学的な指導が行われたことが分る。裁縫専修生の志望者にも、体操を課せるようになっていく。

河原一郎は一八九七(明治三〇)年の「女子の体育」という論考で、将来妻や母となる時に生徒時代の体育の効果は持続せず、身体の鍛錬と心の修養を勉め、心身を保全し、無病長寿でなければ、その善行を子孫に与え国家に利益を及ぼすことができないと語り、女生徒の体育を至難の大問題として、外国人の論を引きつつ、深呼吸は心の修養に特効があることや冷水摩擦等の健康法、目や歯の保健衛生について述

べている。⁽¹⁸⁾ここで、「心の修養と体の鍛錬」という言葉が出てくることに注目したい。

さらに、河原は「根本教育」という論説で、西洋人と日本人の平均身長と体重の違いを挙げて、体力の強弱が生存競争に関係することを述べ、母親が大きく強壯な時はその子も大きく強壯になり、生まれつき虚弱であつても寛大な面と厳格な面のつり合いが取れた保育で養成されたならば、強壯な子どもの不摂生な場合より健康で長寿になるとして、女子教育に体育が必要で、時に知育が欠かせないと言う。⁽¹⁹⁾体格で劣る日本人が西洋人を相手に日本の国権を伸張するために、衣食住を改め、体育を勧める論が起つていた。日清戦争を経たこの時期には、強壯な子どもを産む母を養成するために、体育の重要性が主張されたのである。また、バランスの取れた保育を行うために、知育も必要であるとされた。

入学志願者が定員を超過することが多くなり、一八九八(明治三一)年からは比較試験が行われた。一八九九年二月には「高等女学校令」が公布され、三年制、五年制を認めながらも修業年限は四年を原則とし、北海道、各府県に高等女学校の設置が義務づけられた。それに従い、本科は高等小学校二年修了を入学資格とする五年の課程になり、補習科は二年を一年に変更し、別に修業年限五年の高等女学校卒業生を対象に二年の国語漢文専攻科を設置し、卒業すると無試験検定で師範学校女子部、高等女学校の教員免許状が与えられることになった。⁽²⁰⁾公立高等女学校で五年制の課程を置く府県は、明治末でも東京、京都、兵庫だけであり、公立高等女学校で無試験検定を得たのは京都府高等

女学校のみであった。⁽²¹⁾

専攻科の授業が開始された一九〇〇(明治三三)年に、京都府高等女学校は寺町荒神口下るの新築校舎に移転し、在籍者は本科六〇七名、補習科四七名、国語漢文専攻科一四名、裁縫科一五〇名の合計八一八名になった。本科の割合が増えていることが分る。校舎の新築を理由に定員を八〇〇名にするのを認可されたことから、女学校の人気が想像され、卒業生の総数は一六二八名(入学者五五二二)に及ぶ。⁽²²⁾初期の女学校では中途退学者が多かったが、この時期になると入学者数に対する卒業数の割合も二分の一以上に増加した。一九〇一年には二年の家事裁縫専攻科ができ、卒業生は国語漢文専攻科と同じ特典を得た。一九〇三(明治三六)年から卒業試験が行われ、国語漢文専攻科卒業生一一名、家事裁縫専攻科卒業生一四名に教員免許状が下附された。卒業生は、京都淑女学校、京都府立高等女学校、津山高等女学校等に一四名が就職し、他は家事に従事した。半数以上が教職に就いたのである。⁽²³⁾専攻科は一九〇九年より三年の課程になった。

新校舎への移転後は運動会が始められ、例えば、一九〇三明治三六)年には唱歌やボート遊び、子ども遊び、カドリール等の遊戯や踊り、巫鈴送り、輪くぐり、障害物競争、旗おくり、旗とり競争、短冊合せ、厨房競争等の競争が行われた。⁽²⁴⁾

ところで、女子教育が浸透してきたこの時期には、女子教育の目的としての良妻賢母論に変化が見られる。それまでは女子は賢母となつて人才を育てることにより富国強兵に貢献できるという論法が見られたのだが、高等師範学校教授三島通良は一九〇〇(明治三三)年の会誌

に掲載された「味噌一嘗」の中で、女子は教育を受けたにもかかわらず、気楽で社会から見下げられていると述べる。その原因として、実学を授けるのが十分でなく、国民の一人として、男子とともに家を興し国を富ます感を与えることが足りないと言う。そして女子は活発に運動し、食事も沢山食べて十分元気を養い、身体を十分に鍛えて智徳を涵養し、智あり徳あり、健康なる良妻賢母となり、家事は勿論、手芸、商業、農事、水産のような実学に頭を向け、国家の為になるように論じている。⁽²⁶⁾三島は、健康な良妻賢母になるだけでは十分でなく、一人の国民として「富国」への貢献を求めた。

日清戦争後は入学志望者が増え続けて収容しきれなくなり、一九〇四(明治三七)年には京都府立第二高等女学校(現在の朱雀高校)が設立され、京都府高等女学校は京都府立第一高等女学校と改称した。第二高等女学校は理科、家事、裁縫に重点を置く等の特色を持つ学校であり、⁽²⁷⁾少し家政面に傾斜していた。同年、南桑田郡立高等女学校ができたことからも、女子教育に熱い視線が注がれていたことが想像される。逆に、裾野が広がったことにより、女子教育に対する様々なニーズがあったことも想像に難くない。なかでも、上記の三島の論から窺えるように、さらなる実学の充実が要請されていく。

四 日露戦争期から明治末期まで

日露戦争中も京都府立第一高等女学校では、海陸軍に巻軸包帯の献納等の寄付を行っていた。この時期には精神論が登場する。一九〇四

(明治三七)年に河原は、日本女子が見くびられているのは知識の欠乏からであり、思想変遷期が到達し、新知識を得て新思想を備えることは喜ぶべきであるが、それが上滑りになって日本の女子に本来備わっている女子の大和魂を弱くしてはならず、将来の日本女子は和魂洋才であらねばならないこと、島国的な考えを棄て、夫を扶け励まして、世界的事業を興すに勉めねばならぬこと、これらを根本として身体精神の修養鍛錬に勉めねばならぬことを主張した。そして、第二の国民を造り出すべき、大責任を有する女子の第一の資本は身体であり、身体精神共に健全に至るの道は体育、摂生、精神の修養であり、根本的に身体精神を修養鍛錬せねばできないと語る。⁽²⁸⁾ここでは、「身体の鍛錬と心の修養」という言葉が強調されていくのである。

西洋相手に戦った日露戦争は、女子教育においても「世界」に目を向けさせたのだが、「日本人の魂」という論法も見え隠れする。そして、今度は女子の役割が広がっていくのである。一九〇五(明治三八)年に河原は、「精神の修養」という記事で、日清戦争以前に女子は軽く見られていたが、今日は人々がその力の大なることを認め、女子問題を研究することにもなり、女子自らも男子を助けて大いに世に貢献せねばならないことに注意する傾向が見られ、女子の責任は重くなつたと述べる。責任を尽くし国家社会に貢献するには、家政育児に全力を注げばよいのは間違いで、時宜によっては社会公共のことに大いに活動せねばならないが、肝心の家政育児をなげうって国家社会のことに奔走するのは、むしろ大変な心得違いであると語る。女子は家を治め、子を育みその余力を以て、国家社会に盡さなければならず、その

ためには、精神身体の修養がもつとも必要であり、精神の修養を積んで、体格を丈夫にし、内外何れの方面にも活動のできる覚悟を持たねばならないと主張する。そして、精神の修養というのは言うことは易く行うことは実に難しく、女子は殊に神経過敏のために身体を悪くする人が多いが、一つの理想を立て修養を積んでいけば、直らぬということはないと述べる。⁽²⁹⁾河原は、一九〇六年にも「精神と身体との関係」という文章で、精神を健全にする修養は女子には殊に大切で、道徳や知識の点よりも修養を要することはあるが、卑近で誰でもでき、精神を鎮める方法として深呼吸を挙げ、精神が鎮まった時は物の善悪を誤ることも少ないと書く。⁽³⁰⁾

このように、女子の役割は広がっていったが、そのためには精神を整える修養が必要だった。河原は、精神と身体との関係は密であると述べているが、この時期の体操はどのような内容だったのであろうか。一九〇七(明治四〇)年の創立三五周年の記念式では、歌披露や唱歌、ピアノ連弾、ヴァイオリン、朗読、家政の話、庖刀式等が行われた学芸会とともに、運動会が催された。運動会では、円舞、メヌエット、スパニッシュダンス、列舞、三拍子の行進、球竿体操列舞、長刀術等が演じられた。最後に演じられた「本校独特の長技」である長刀術は「単騎敵陣に肉薄するが如く、女丈夫勇壯凛烈」の気概を示したと書かれている。⁽³¹⁾国を助ける女性としての役割が広がっている様子が窺え、かつ身体の鍛錬を目的にした活動と言えるのではないだろうか。「単騎敵陣に」という言葉からは精神の修養ともつながっていることが窺える。

一九〇八(明治四一)年十月の運動会では、球竿体操、徒手体操、哑鈴体操等の体操、木環列舞、マズルカ、カドリール等のダンス演技、徒歩競争、障害物競争、渡橋競争、綱引き、書方競争、デッドボール、バスケットボール、ローンテニス等の競技、長刀が盛大に行われた。河原は、身体の鍛錬と精神の修養を運動会の目的として挙げ、この目的を達するための覚悟があつてこそ、演技も活発に、精神的に潔く行うことができ、勝敗を外にして自己の自分を盡すべきであると述べている。⁽³²⁾このように、運動会は身体の鍛錬だけではなく、精神修養のための重要な場でもあつた。

校外学習も盛んに行われた。例えば、一九〇八(明治四一)年には春に上級生が比叡山登山を行い、春季総運動を須磨舞子で行い、秋季総運動として茸狩り、級別旅行として法隆寺、笠置、高雄嵐山、東山等に観楓を兼ねて修学旅行が実施された。身体の鍛錬とともに、見聞を広め、自己を修養する場でもあつたのだから。⁽³³⁾

他方、同年の学芸会では、唱歌、朗読、対話、染色、活人字(アルファベット)を記した札をかけた生徒が、並んで単語を綴る活動)、保育等が行われた。なかでも、補習科の生徒が行った保育では、本科一年生を園児と見立て、保母役の生徒が「うさぎと亀」の話をして、幼稚園保育の様をすべて再現した。⁽³⁴⁾「幼児の訓練」は一九一〇年九月二十八日の皇太子の行啓の際にも本科五年生の家事科で行われている。⁽³⁵⁾このように、明治末の京都府立第一高等女学校の教育では、身体の鍛錬とともに実際的な賢母教育も重視されていたのである。

五 おわりに

志望者が急増した日露戦争後、一九一〇(明治四三年)の高等女学校令改正により、主として家政に関する科目を修めようとする者のために、実科高等女学校がつくられた。修業年数が二、四年の実科高等女学校は、高等小学校に附設することもでき、簡易な女子中等教育機関となった。この種の学校で主要科目の裁縫を教える教員が非常に多数必要となり、四年程度の高等女学校卒業生も、家事裁縫専攻科三年の課程を終えて卒業試験に及第すれば、無試験検定の資格が得られることになった。実科高等女学校が続々設置されることから、京都府立第一高等女学校では、むしろ志望者がある本科の学級を増加させる方が時宜に適するとし、創立以来の裁縫科を一九一三年に消滅させ、普通教育に舵を切ったのである。

このように、明治時代の京都府立第一高等女学校では、始まったばかりの女子教育への理解を求め、ニーズを取り込み、発展してきた。欧化主義からその反動の時代、その後の女子教育の興隆の時代で、唱歌科や裁縫科が消滅する等、制度の面からも教育課程が目まぐるしく変化した。しかしながら、初期の頃から新しい西洋文化と伝統的なものの両面からの教育が行われ、それは明治時代を通して引き継がれていった。大正末期からはさらなる女子教育の発展とともに、入学志願者が激増し、新たな女子専門学校の設立へとつながっていく。

良妻賢母を目指した女子教育では、人才をつくって国家に貢献する

ための教育が重要であった。そのために強壮な身体をつくる必要があったのだが、女子に求められる役割は家庭内だけにとどまらず、「富国」を目指す国民としての役割も求められ、広がっていった。西洋諸国と肩を並べる強国を志向する風潮の中で、子を産み、余力を以て国家に尽くすために、体格的に劣る日本人に精神修養の必要性が唱えられた。そして、健全な精神は健康な身体に宿るという理屈から、強壮な子を産み、精神を修養する二重の意味で身体の鍛錬と女性教育が結びついていったのである。大正時代以後の京都府立第一高等女学校の教育については今後の課題としたい。

注

- (1) 新町徳兵衛「河原校長還暦記念明治女子教育史略年表」『鴨沂会雑誌』第二五号、一九〇九年二月、四九頁。その他、沿革については、京都鴨沂会編『母校創立一〇〇年記念 京都府立京都第一高等女学校沿革誌』(一九七二年)、神辺靖光『女学校の誕生 女子教育史散策明治前期編』(梓出版社、二〇一九年)、桑原三二『高等女学校の成立―高等女学校小史・明治編』(高山本店、一九八二年)、小山静子『高等女学校教育』(本山幸彦編著『京都府会と教育政策』日本図書センター、一九九〇年、三〇三―三五五頁)の記述を参考にした。

- (2) 日本で最初の女学校としては、一八七二(明治五年)二月に設置された官立の東京女学校が挙げられる。ここでは尋常小学校の科目に英語学を加え、一八七四年度の教師は全部女性で英語は外人教師であったが、一八七七年二月で閉じられて、希望する六〇名を東京女子師範学校に収容した。

- (3) 山住正巳編『福沢諭吉教育論集』岩波書店、一九九一年、二〇頁。

- (4) 『鴨沂会雑誌』第二二号、一九〇七年二月、一一八―一九頁。

- (5) 『鴨沂会雑誌』第一号、一八八七年八月、一四―一六頁。『鴨沂会雑誌』

- 誌』第二号、一八八九年八月、二二頁。
- (6) 河原一郎『修身講話』『鴨沂会雑誌』第三号、一九〇八年二月、一一一頁。
- (7) 『鴨沂会雑誌』第四号、一八九一年二月、五二頁。
- (8) 木村匡『森先生伝』金港堂書籍、一八九九年、一九七—一九八頁。また、良妻賢母教育については、小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、一九九一年）、姜華『高等女学校における良妻賢母教育の成立と展開—教育理念・修身教科書・学校生活の総合的研究』（東信堂、二〇一二年）に詳しい記述がある。
- (9) 『鴨沂会雑誌』第五号、一八九二年二月、六二—六九頁。
- (10) この経緯については小山静子『高等女学校教育』（前掲書、三〇九—三二〇頁）を参照。
- (11) 『鴨沂会雑誌』第三号、一八九〇年八月、四〇—四一頁。
- (12) 『鴨沂会雑誌』第五号、前掲書、三八頁。
- (13) 『鴨沂会雑誌』第七号、一八九四年二月、三〇—三三頁。
- (14) 高等女学校研究会編『高等女学校の研究—制度的沿革と設立過程』大空社、一九九四年、六二頁。
- (15) 丸山彩は「明治十—二十年代の京都女学校・京都府高等女学校における音楽教育の展開」（『音楽教育学』第四一巻第二号、二〇一一年、一三—二四頁）の中で、唱歌専修科の生徒にとって音楽の学習は、学校教育の枠を超えたお稽古事的なものであったと述べている。
- (16) 『鴨沂会雑誌』第八号、一八九五年二月、六二—八一頁。
- (17) 『鴨沂会雑誌』第九号、一八九六年二月、四一—四二・四五頁。
- (18) 河原一郎『女子の体育』『鴨沂会雑誌』第一〇号、一八九七年二月、八一—八二頁。
- (19) 河原一郎『根本教育』『鴨沂会雑誌』第一一号、一八九八年二月、一一—一頁。
- (20) 一九〇九（明治四二）年に、国語漢文専攻科、家事裁縫専攻科の修養年限が三年に改められた。
- (21) 小山静子『高等女学校教育』前掲書、三二—一頁。

- (22) 桜井役『女子教育史』増進堂、一九四三年、一五五頁。
- (23) 『鴨沂会雑誌』第一三号、一九〇〇年二月、二二—三二・五二—五三頁。
- (24) 『鴨沂会雑誌』第一六号、一九〇三年二月、九五—九七頁。
- (25) 同書、一一—一七頁。
- (26) 三島通良『味噌一嘗』『鴨沂会雑誌』第一三号、前掲書、一〇九—一六頁。
- (27) 河原一郎『随感随話』『鴨沂会雑誌』第一七号、一九〇四年二月、三四—三五頁。
- (28) 同書、八四—九三頁。
- (29) 河原一郎『精神の修養』『鴨沂会雑誌』第一八号、一九〇五年二月、一五九—一六三頁。
- (30) 河原一郎『精神と身体との関係』『鴨沂会雑誌』第一九号、一九〇六年二月、一六〇—一六四頁。
- (31) 『鴨沂会雑誌』第二二号、一九〇七年二月、一一—一七頁。
- (32) 『運動会の記』『鴨沂会雑誌』第二三号、前掲書、一三三—一三九頁。
- (33) 『鴨沂会雑誌』第二二号、一九〇八年七月、一五二頁。『鴨沂会雑誌』第三号、前掲書、一三二頁。
- (34) 「五月二十八日学芸会の概況」『鴨沂会雑誌』第三号、前掲書、一五三—一五六頁。
- (35) 「皇太子殿下臨啓記」『鴨沂会雑誌』第二七号、一九一〇年二月、一五五—一五六頁。

謝辞

資料の収集にご協力くださいました京都鴨沂会、京都府立京都学・歴史館に深く感謝申し上げます。

写真1 旧校舎

(『京都府立第一高等女学校創立第三十五年記念誌』京都府立京都学・歴史館所蔵)

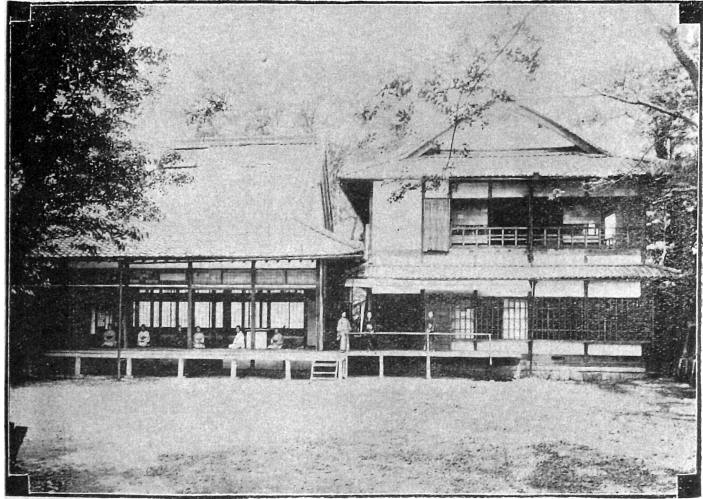


写真2 作法教室

(『京都府立第一高等女学校創立第三十五年記念誌』京都府立京都学・歴史館所蔵)



写真3 河原一郎校長
(『京都府立第一高等女学校創立第三十五年記念誌』京都府立京都学・歴史館所蔵)

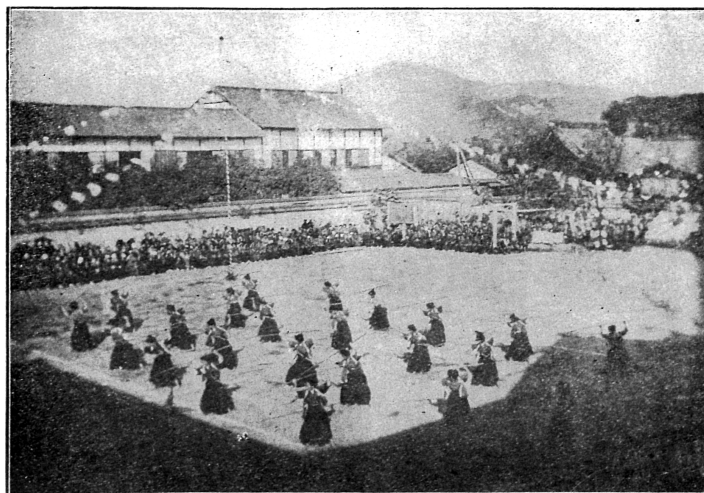


写真4 1908年10月30日秋季運動会・長刀共同演習
(『鴨沂会雑誌』第23号 京都府立京都学・歴史館所蔵)